

水牛通信

VOL.6 NO.5
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす
水牛はたがやす
稲は音がなく育つ

隣りの男 鎌田慧 2

「スター」日記 坂本龍一 4

家族・友だち日々の糧 志沢小夜子 6

料理がすべて 田川律 8

先生は、すけべえ 糸取アヤ 10

たのしみがなくなった 高橋悠治 12

洋服とはなしたタン吉 みやたにだい 14

子供たち 柳生まち子 16

行ったり来たり 西山正啓 18

ブタ草の生態 竹内晶子 20

万物は流転す ノヴァコフスキ 22

ぼくが作った本 平野甲賀 24

わるいくせ 八巻美恵 26

下手の横吹き笛日記 西沢幸彦 28

友だちと吞めば本になる 津野海太郎 30

四点カット 柳生弦一郎

隣りの男

4月1日。徹夜。ようやくくできた原稿を家において羽田へ。中華航空、台北經由ジャカルタ行。前日買ったばかりのガイドブックを読みはじめたら、インドネシアはビザが必要、とある。ショック。そんなことは知らなかった。そういえば、カウンターで男の係員がビザがどうのこうの、といっていたのだ。せつかく眠って行こうと思つたのに、眠気は吹っとんでしまった。

しばらく様子を見て右隣りの男に話しかけてみる。五〇すぎの技術者タイプ。東北訛りだったので、秋田あたりと見当をつけていたのが、ズバリ当てTDK秋田工場の幹部。セラミックコンデンサの技術指導で、台湾と韓国をまわる、という。

インドネシアはビザが必要、とは事実ですか。「さあ」と彼は頼りない。

男は「ジャカルタまでですか」と日本語でいう。早稲田の中国文学科を去年卒業して、塾教師。インドネシアの大学にもぐりこみたい、と意欲的である。卒論は魯迅。いまだき珍しく本を読んでいる立派な学生である。と誉めるのは、読んでいる本の中に、小生のも入っていたからである。

4月7日 午前七時十五分。ジャカルタ・ハリム国際空港発。機内はガラ空き。空港で知り合った商社の部長タイプの男は、ファーストクラスの座席へ。しょっちゅう来ているとの事。クアラ Lumpur の出航は、一時間の遅れ。待合室で隣り合った男は六〇歳の紳士。インドネシアの商情視察。小生とちがつて楽しいことが一杯あったという。本人は木材の買付けを狙っているようだが、木材はインドネシアの規制が厳しいらしい。問題は政府を握っている退役将校たちのコネ、である。彼の知り合いの旧軍人は、ベンツを二

「台湾は要りますけどね」
また、ショック。もしインドネシアに入れなかったら、台湾でも見物して帰ろう、と思いはじめていたからである。

台北発十二時四五分（日本時間午後一時四五分）。ジャカルタ行き出航。右隣りの男は韓国人。五〇すぎの、小生などよりも日本語の達者な実業家タイプ。終戦まで、関西にいた。仕事の関係からいまでもよく日本に行くという。四年後のオリンピックにむけて、韓国がいかに発展しているか、とひとくさり。友人がジャカルタで大きな焼肉屋を経営しているという。

ところで、インドネシアはビザが必要ですか。とおそるおそる尋ねると、「ぼくは業務用ビザだけど、観光客は必要ないんじゃないかな。」「そうでしょう」とわたしは、安堵の胸をなぞおろしたのであった。

機内食が出る。ビーフがいかチキ

台もっている、という。リベートの成果である。

「日本人が経営した食堂はぜんぶ成功している。まあ、いまださら食堂のオヤジになる気はないがね」

ある日系の合成繊維メーカーは、設備増強によって、五〇パーセントの能力アップになっている。ところがそれはオフレコだった。たぶん、税金の関係でしようね、と取材の一部を小出しにしてみる。

「しかし、インドネシアは賃金が安いね。あれでは奴隷賃金だよ」と、その六〇歳の遊び人は、過激な発言をする。クアラ Lumpur で満席。台湾の観光ツアーのためである。隣りの男は、三島由紀夫の『豊饒の海』を読み耽っている。もう四巻まで翻訳が出たとのことである。

台北から乗ってきた、小柄な新聞勧誘員タイプの男は、柄にもなく二人の女性をつれていた。「どちらへ行つて

ンがいいか、とエアーステス。彼はきよんとしている。そのあと小生には日本語で「ビーフがいかチキンかいいか」と、彼は、「おどかさなよ、日本語ができるんじゃないか」と抗議した。そのすこし前まで、彼は外国語がひとつもできない小生を励ますように、日本語ができれば、どこへ行つても不自由なし、といっていたのだった。彼にとつて、日本語は国際語なのであろう。いろいろ複雑なことを考えさせられた。好むと好まざるとにかかわらず、われわれは経済大国の住民なのである。

左隣りの長身の青年がトイレに立ったとき、「あいつはシンガポール人さ」と断定的にいう。この飛行機はシンガポールも経由する乗り合い飛行機なのである。座席に置き去りにされた本は、英語版のインドネシア語の教科書である。なるほど、と彼の観察眼に感服していると、トイレから帰って来た若い

きましたか」フィリピン、といわれてピンときた。「彼女たちはいくら欲しいといってるんですか」こんな場合は早目に核心に迫った方がいい。二カ月に二〇万。三カ月に三〇万ぐらい、と彼は答えた。さいきんは成田空港の税関がうるさいから、羽田にした、ともいう。マニラ―台北―羽田は、人目につかない新ルートである。テキも考えている。羽田で見守っていたが、二人の女性は無事、関門を突破。出口では、アフロヘアースタイルのあんちゃんに貧乏ゆすりをしながら待っていた。「就職先」は、川崎駅前のパブ「ドム」、御関心のある方は行ってみて下さい。二人以上のフィリピン女性がいて、相手をしてくれます。

鎌田慧

「スター」日記

三月十五日(休) 十時に起きる。アシユラ(猫)が来たからだ。夜、「水牛通信」の原稿を書く。

三月十六日(金) 九時半出発。十一時羽田着。三時那覇着。夜、万座ビーチに角川映画「メイ・イン・テーマ」撮影中の森田芳光監督を訪ね、「サウンド・ストリート」の為に対談。桃井かおりさんと酒を飲む。

三月十七日(土) 二時羽田着。三時、六本木クロバー。本本堂のことで義江氏、秋山氏と打合わせ。本のタイトルを「長電話」に決定。四時、六本木ピット・イン。渡辺香津美コンサート「MOBO倶楽部」のゲスト。八時近く本番始まる。「サントリー・オールド」「ジムノペディ」の二曲を香津美とデュオ。四年ぶりのライブ・ハウス。三月十八日(日) ゴロ寝。夜、サント

リー「サスケ」の為のデモ・テープづくり。

三月十九日(月) 十一時「ミスター・ミュージック」事務所。CM打合わせ。十二時、初台レオ・ミュージック練習スタジオ。リハーサル、悠治さんに会う。リハーサル一時間、コーヒー二回。五時、ヨロシタ・ミュージック事務所。七時、渋谷「ライブ・イン」カーテイス・メイフィールドを観る。

三月二十日(火) 三時、渋谷「ライブ・イン」リハ。七時、本番。フリー・イムプロヴィゼイションは疲れる。悠治さんのピアノが新鮮。音楽関係者、文学関係者、マスコミ等知った顔が沢山。酔った三浦雅士氏にからまれる。

三月二十一日(水) 近藤等則さんに電話でセッションに参加したくない旨伝える。加藤登紀子コンサート・チラシ用原稿書く。

三月二十二日(木) 一時、音響ハウス一階「エル」で「モア」の金沢さんの

取材。クセナキスについてコメント。二時、2スタ。サントリー「サスケ」のCM録り。八時終了。

三月二十三日(金) 十二時半、広尾ナニワ楽器、PPG、フェアライト等、デジタル・シンセサイザーの見学。三時、原宿「モッズ・ヘアー」でカット。四時半、ヤノ・ミュージック事務所、スウェーデン国営放送のインタヴュー。インタヴューのレナは利発な女性。六時半、あんこう料理のうまい「いせ源」でYMO写真集「シールド」の打上げ。二次会で霞町の「シリンド」

三月二十四日(土) 十二時、音響ハウス2スタ。「AGFコーヒー」のCM録り。七時終了。十時、「インク・ステイック」で「カトウラ・トウラーナ」というバンドを観る。

三月二十五日(日) 二時、原宿「モッズ・ヘアー」でパーマをかける。五時帰宅。二十八日の萬流コピー塾用BG Mの選曲。「山海塾」をTVで観る。

三月二十六日(月) 朝、電話有り、英国アカデミー賞音楽賞をとった。二時、音響ハウス3スタ。大貫妙子のアレンジとリミックス。朝五時終了、久しぶりの朝まで仕事。

三月二十七日(火) 十二時、音響ハウス2スタ。大貫妙子新曲のアレンジ。六時半、新橋第一ホテル、「戦メリ」のパーティー(大島プロ主催)。八時半、ヤノ・ミュージック事務所。冬樹社、本本堂、ヤノ・ミュージック三者で会議。

三月二十八日(水) 十二時、有栖川スタジオ2スタ。CMのスタイル撮り。七時、六本木中華料理屋、エリザベス・レナールと会う。フランス国営放送の特番の打合わせ。

三月二十九日(木) 十二時、音響ハウス3スタ。大貫妙子新曲、ダビングとリミックス。九時終了。

三月三十日(金) 四時、中畑広告制作所。サントリー・オールド用打合わせ。

五時半、NHK四〇一スタ。サウンド・ストリート収録。九時「シリンド」糸井氏と打合わせ。

三月三十一日(土) 四時、風太と「少年ケニヤ」を観に行く。九時帰宅。

四月一日(日) ボートとして。四月二日(月) 一時、音響ハウス2スタ。ソロ・アルバムのレコーディング再開(去年、中断していた)。八時、義江氏と「長電話」の打合わせ。本づくり、宣伝のこと等メいっぱい忙しい、が楽しい。

四月三日(火) 一時、音響ハウス2スタ、ソロ・アルバム、二十四曲目録音。もちろん一日ではできない。一曲に何日もかかる、否かける。八時、義江氏と打合わせ。「ステューディオ」の奥村氏を訪ね、表紙のステッカーのデザインを頼む。

四月四日(水) 一時、音響ハウス1スタ、サントリー・オールドのCM録り。八時半、帝国ホテル4F「柏」。講談社

「イン・ポケット」ゲスト河合雅雄氏。大変刺激的。十一時半、「シリンド」で井上氏と打合わせ。

四月五日(木) 一時、新宿「シアター・アップル」、YMO映画「プロパガンダ」試写。

四月六日(金) 一時、音響ハウス2スタ、ソロ・アルバム録音。八時半、NHK四〇一スタ、サウンド・ストリート収録、ゲスト糸井重里氏。十一時「シリンド」義江氏と打合わせ。

坂本龍一

家族・友だち日々の糧

三月二十四日 もうすぐ小学校三年になる長女のまや子と、五才の長男、浩太郎と有楽町線池袋駅ホームで待ち合わせ、ドラエもんの映画に行く。(ドラハッパというらしい。ドラエもん、ハットリくん、パーマン)ものすごい人で、席を確保するのに一苦労。パンフレットを買ったが、奪い合いで、休み時間になったら、相手をののしっている、浩太郎のアホ、トンマ、マスケ。お姉ちゃんのケーチ、バーカ。(二年前くらいは、ののしる中味が面白かった。浩太郎曰く、お姉ちゃんの椅子、机、スリッパなどと日常生活に使われ、あまりふりむかれないものに限られていたが、最近は月並みになった。)やらせるだけやらせて疲れるのを待つ。

そのうち映画が始まり、お腹がすいたのか買ってきたハンバーガーをやる

と、つつみをあげるや床に落とした。半ベソで、お母ちゃんの分一つあげるからパンフレットお姉ちゃんに渡しなと言つて、ようやくパンフレットの件は落着いた。と思いきや、一本目の映画が終わると、浩太郎が帰りたいと言いだした。

だからやだよ、浩太郎とき映画にくるといつつもこれだもん。と姉の方が今度は半ベソ。浩太郎をおだて、終わったらソフトクリームをおごるからと約束して、ようやくこれも落着。終つて映画館を出ると雨。ソフトクリームを食べながら、おいしいねと顔を見合わせ仲良くうなずき合っている。お母さんは疲れたよ。

三月二十五日 学童クラブの父母会主催の三年生を送るお別れ遠足。近くの練馬区と板橋区にまたがる光が丘公園へ(旧グラウンドハイツ)。何しろ米軍の接収地で、公園・公社・都営とアパートが林立している中に後樂園球場

の何倍かだかの公園がある。まや子と浩太郎はそれとローラースケートをはじめた。私は目的のよもぎつつみをしようと思つたら幼くてダメ。あと二週間もすれば、つくしも出ていいわよと何人かのお母さん。朝早く、はりきつて作ったお弁当を食べ身体を動かして、すっかりいい気分になったが、家に帰るとさすがに足腰が立たない。年だなーと思つたり、イヤ太りすぎだと思つたり。

三月二十六日 夫が半日休暇をとつて、息子とウルトラマンゾフィーへ。けたたましく六時半頃帰ってきた。遅いねーと言つと、面白くて二回見たんだつて。浩太郎はすっかりゾフィーになりきっている。パンフレットを広げてウルトラの兄弟の説明。ついにウルトラの母にさせられた。お母ちゃんはユリアがいいという、太ってるからダメ、それに母だからウルトラの母に決まってるよ。

パンフレットの母は、一番後に祖父と並んでいるのだ。父は一番前、何で母は後なのかと問うと、母は小さいんだよと答える。くやしきからもう一度聞くと、同じ答。質問の意図がわからないんだ。くやしき!

息子は、その夜パンフレットを抱いて寝ていた。

三月二十七日 まや子が美恵さんとこへ泊りに行くので、永田町で夕方待ち合わせ、美恵さんとバトンタッチ。二十八日、葉弥君と美恵さん、まや子でプロジェクトAを見に行つたら、待ち合わせの渋谷のロロに行く二人ともパンフレットをかかえてうれしそう。家へ帰って、楽しかったのか、ずっと話をしつづけて、寝たのが十一時。浩太郎は友人宅へ泊りに行って静かな夜。夜中にゴトゴト音がするので、びっくりに起きて見に行くと、夫が帰ってきて、ラーメンを作つて食べていた。

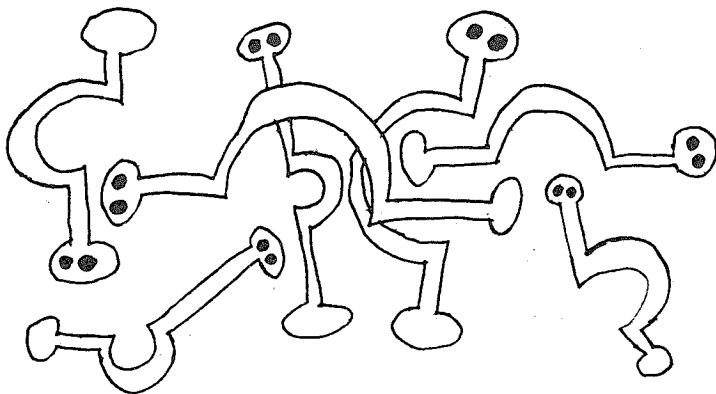
四月一日 風の谷のナウシカをどうしても見たいとまや子の強い要望で、仕方なく池袋にくり出したが、とても入れない。それじゃ少年ケニアを見ると言うので、ケニヤへ行く。こちらもすごい人で、ずつと立見、ようやくすわられたのは終り三〇分前くらい。帰つて三日間のスキーから帰つて夫と早速ケニヤの話、あつ、この絵覚えていよ、と夫の方がパンフレットに夢中。

四月六日 ついに恐怖の春休みは終わった。こっちは、教職員の休みの時がかきいれ時という組合に勤めているものだから、子どもとのつきあいは、どうも忙しい日程になる。ゆつくり、のんびり二、三日休んでみたいなー。

しかし、給食が始まるまでは、弁当作りは続く。まっ、夏休みのことを思えば、なんてことはない。当分出張もないし、学期始めは、子どもの気持も浮き足立っているから、早く帰つて、子どものケンカにつきあうか? (す

ごい姉弟ゲンカで、絶えずやっているのだ)桜でも咲いたら花見に出かけ、やつぱり家族は日々の糧、と思ひ新たに新学期と行きますか。

志沢小夜子



料理がすべて

〈今月の外食〉「ぐ」(下北沢) 春雨定食／「店名忘却」(京都・京阪三条駅前) きつねうどんと飯／「明治軒」(大阪・心齋橋) 銀串定食／「ポテト」(自由が丘) グラタン／「サンデイイヌ」(東京駅構内) ベーコン、スクランブル・エッグ、パン／「讃州うどん」(京都・大宮通) 串かつ定食／「ピッツグ・ノーズ」(京都・丸太町松原) メンタイ・スパゲティ／「新愛園」(神戸・三宮) アサリいため、五目豆腐、スペアリブ唐揚、卵スープ／「GRE」(渋谷) ベーコン・サンドイッチ／「新幹線内食堂」(浜松あたり) 鰻井／「店名忘却」(名古屋・市民会館へ出前) 味噌煮込うどん／「銀座」(名古屋・栄) 山菜そば、カレイ塩焼、帆立バター焼／「オーファンベック」(銀座) ハンバーグ定食／「ムロ」(高田馬場) 玉

紅ギョーザ、トリ煮込そば、スペアリブ唐揚／「池林房」(新宿) イカメシ、ホッケ開き／「大陸」(新宿) 蒸しギョーザ、アワビのオカユ／「鹿六」(六本木) エイのヒレ、山菜吹寄せ／「陶玄房」(新宿) 腸詰、オムスビ／「杉の子」(原宿) トリ・野菜鉄板焼、肉ジャガ／「だつたん」(新宿) 焼うどん、グリーン・アスパラの卵巻／「DO」(代々木) オムスビ／「文明堂」(東銀座) アサリ・スパゲティ／「のろ」(吉祥寺) 玄米定食／「火の国」(下北沢) 味噌ラーメン／「羽衣」(渋谷) パオズ(蒸しギョーザ)、チマキ、パイコーメン(スペアリブ入り麩)／「初花」(上野毛) えび天定食／「ひさご」(駿河台下) 焼肉定食(名前がついていたが忘れた)／「モテイ」(六本木) チキン・タンドリ、カリフラワーとじゃが芋のカレー、チキン・カレー、ラッシー／「クローリーズ・クリーク」(南青山) 筍木の芽和え、トリの

サラダ、豆腐ステーキ、シメジのバターいため、玄米オニギリ／「おっとっと」(下北沢) イワシの刺し身、筍の煮付、イサキ塩焼。

〈今月の料理をめぐるニュース〉①コンピュータを使って料理を選ばせる話。コンピュータに、自宅の冷蔵庫の中の貯蔵品目と残量、調味料の量、スパイスの種類と量、それにもちろん料理各種、それから料理に要する時間を覚えさせ、働いて帰ってきた時に、今から何か食べたいが、冷蔵庫にはこれこれがある、というのを「尋ねる」と、「デハコレハ？」と答えてくれるそう。そういうコンピュータを家庭向けに売り出そうと考えているという。冷蔵庫開けて覗いて考えたらいいと思うけどね。②お世辞にも酒呑みとは思えないのに、勘定してみると、この一カ月で約十五日、つまり二日に一回はアルコールを口にしていた。と

いってもビールならコップ三杯、焼酎お湯割、せいぜい二杯なのだが。今月飲んだ焼酎。いちこ、猿川、紅乙女、さつま富士、六調子、玖磨。

〈今月の自炊〉①アサリのワイン蒸し。いって何、特別なことはない。ニンニクを刻んで、オリーブ油で狐色にしたため、そこへアサリを入れ、ワインをタップリかけ、塩、コショウして、煮立ったら、大葉を刻んで散らす。②ゆかりこ雑炊。ゆかり、とは赤紫蘇の葉と実を味付けしたものが、これを入れて粥を作り、そこへ卵を割り込むだけのもの。もつとも、別の日、先に粥をたき、卵を割り込んでから、食べる間にゆかりこをかけたなら、こちらの方が香ばしくておいしかった。③イカのパタ焼き。これもカンタン至極。ニンニクを刻んで、サラダ油でいためそこに小さな柔かいヤリイカを、開いて、ワタを取って手頃の大きさに切っ

て入れ、塩、コショウして、これも好みてシソの葉を刻んで入れる。イカが大きい時。ワタをていねいに抜いて、これをアルミ・ホイルに包んで、オーブンかオーブン・トースターで十五分位焼く。それで出来上り。信じられないくらいオイシイ。なんの味付けもしないところがミソ。④今月は先月の②湯豆腐⑤シイタケと鶏のしょう油いためが気に入って何度もアンコール。

〈今月のおよばれ〉①3月23日、京都大石哲史くんの実家。かれの義理の兄が、庭で北京ダックを作るほど、中華に凝っているとかで、「キヤバレエ・ヴオルフガング」公演の際お邪魔して、スプタ、エビの中華風、トリ唐揚げ、五目豆腐、スープなど、「コース」でご馳走になった。オイシカッタ。②4月8日、砧公園へ友人の子供のサツエイにノコノコ出かけ、その友人が作った弁当にありつく。豚の唐揚げ。フキの

煮付。ポテトサラダ。ゆで卵をマヨネーズであえたものをパンにはさみ、そのパンを棒状に巻いたサンドイッチにオニギリ。カメラマンの佐藤さんにアロマして貰って、ケモノ(?)のような声を出したら、傍にいた子供が奇妙な動物をコワイモノ見たさに近付いてきて、すっかり仲良くなって、サツカイをして遊んだ。サツエイの子供の名がダイちゃん。この近付いた子供が大二郎だった。ウツミたい。

〈今月のオマケ〉4月20日、昼グレコ(桜新町)で美恵さんに会い、夕方グレイン(表参道)で林みかんに会い、そのあとグレ(渋谷)で、上智大学の学生と会った。もつとも、グレインは休みだったけど、オカシナ日。

田川律

先生は、すげべえ

こないだ、うちの高校で性教育と銘打った大講演会があった。産婦人科医とおぼしき人物が、最終的にはセックスしたらあかんと言いたいくせに、まん中に理屈をいっばいほさむ。ところが、オナニーの話がえらい受けてしまったので、その分野に深入りし、微に入り細に入り話を始めたのだ。男は中学生までにオナニーをやっていないと出世でけへんとか、女子もOLになったら百%近くオナニーやっていると、かなり過激な話になっていった。へええかいな、ホンマに。へいやいや、いいことなんや。もつとやれ！もつとやれ！をそして、とうとうきわめつきが出た。ここの校長も、実は旧制高校の時オナニーやって、××のとばしあいをやってたんですよ、というやつが。それ以来、うちのクラスの男子は、朝

こつちから話すことも、彼、彼女らには受けている。なぜなら、ボクは思っていること、やったことをなるたけ生の形でしゃべるようにしているからだ。オープンに、そして具体的に語ったならば、反発にせよ肯定にせよ、連中の心の中に入っていくものがあるはずだ。たとえば、初体験のセックスに伴う苦悶。W・ライヒの「性と文化の革命」を読んで、セックスの解放なしには人間の解放はありえんのかなと思ひ込み、心の自然な動きを待たず、無理なセックスをやり、罪悪感にかられたことをしゃべる。現在は……カミさんは愛しているが、それ以外にもいろんな人を好きになってしまふ淫乱さを告白する。ボクの、所かまわず噴出するエロス、これはどうしようもない、とも言う。かくて、自分の思っていることをしゃべれば胸が晴れ晴れし、充実した気持ちで帰途につくのである。ああ幸せ！

高校生の時に芽生えたエロスが、卒

礼台に立った校長の下半身ばかり見ている。南無阿弥陀仏。

あーあ、それにしてもなぜ学校は知識だけなんだろう。何もかも体験する前に、言葉で教えられ、判断力なるものをつけられる。学校で最ももてはやされる言葉は「他人に迷惑をかけるな」なのだ。かくて肉体は圧殺され、エロスはもちろん、企業するおもしろさ、遊びの創出、生活の演出、科学する楽しさ、を体で味わえなくなってしまう。忍耐、がまんの名のもと、暗記にすぎない勉強に鞭打たれる。へ言語という牢獄の中で逡巡してしまふ人間に仕上げられるのだ。

一年間、先生と一緒にいたおかげで、異性観が変わってしまった、という。当然なのだ、ボクがエッチだというのは。高校・大学の時の友人は皆知っているし、ボクは学校と学校外の区別をしないから、それがストレートにクラスに反映するわけだ。許してね、クラ

業後もすくすく伸びることもある。この春休みに、高校を出て2年たつ卒業生たちのクラス会で、Kちゃんとお話ししゃべった。彼女は、高校時代からオープンで明るく、ちよつとグラマーで、しばしばボーイフレンドとのつきあいのうわさのある子だった。自分の思春期の自然に任せて、少しづつ「好色」になっていった彼女は、今やOLとしての仕事は一人前こなす。卒業後、何人かの男の子とつきあってきたが、最近では5つ年上の27才の男性と、バイクを遊ばせての仲が深まり、結婚を考えるようになってきている。けれども、彼女の「好色虫」はまだまだ元気で、ついでにゆきずりの恋に突入してしまう。「あーあ、またやっちゃった……」と思うことが時々あったらしい。この頃は、彼との関係が、バイクのツーリングをいっしょにやったりして、緊密になってきたので、もうしないと決心し、次第に一夫一婦の関係に収束しつつある。

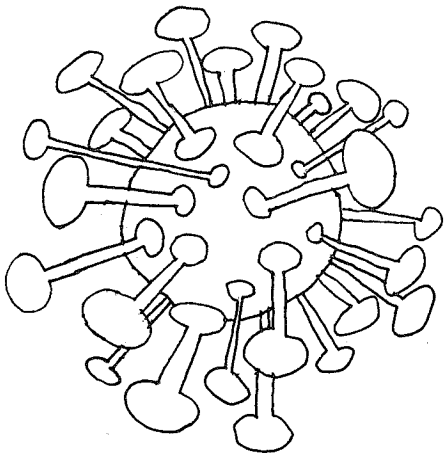
スの皆。そういうふうにするのが、最も楽なのだ。快と楽つまり気持ちEということが生活信条であるので、やっちゃうんだよね。

放課後、ボクは毎日教室に残って、教卓のところで、クラスの連中と雑談を楽しむ。最初は勉強や授業の話から入っても、盛りあがる頃には必ずすげべえな話になっている。男の連中はオナニーの話。連中は「母親にエロ本見つかってまずかった」などと言ってくる。別のやつは「エロ本5冊並べて、次々と視線を移しながらやるのはいい」なんて言ってる。ええ加減にしてよ。

女の子とは恋の話。ボクが高校時代ふられたパターンについてしゃべると、彼女らも好きな男への胸の内を言う。というよりも、聞きだしてしまふ。女の子の柔らかくて、恥ずかしそうな感受性はとてもいいものだ。この恋物語を聞くのを心待ちにしているボクなのだ。

ボクは、この話を聞いて、前近代の村にあった若者宿・娘宿を思い出した。結婚以前の村内の男女の、お互いの想いを尊重した、多種多様な男女関係。その中で、お互いの気持ちも体も通じ合う者同士が、結婚していくという、古き良き時代が、Kちゃんによりがえっているような気がした。いい雰囲気や。ギャルズ・ライフにポップ・ティーン、もつとがんばってよ！

糸取アヤ



たのしみがなくなつた

3月19日 26度目の雪。初台レオ・ミュージックで練習。一時間おくれてたどりつくと、PA関係のセッティングでさらに一時間まつ。練習は一曲だけ。一時間で終わった。

3月20日 渋谷ライブ・インでコンサート。せまいステージに十人とキカイ。立見の客でいっぱい(有料入場者は四百四十人だった)のタバコのけむり。大音量のなかの生ピアノは、自分ではきこえない。フリーの即興は、点火さえしてやれば、それぞれがあつくなつてやっている。客も熱気にのせられてる。

3月21日 コンサートの二日目。坂本龍一がぬけて、キーボードだけ一人になつてしまった。五百円で耳栓を買つた。高周波をカットするしくみ。この日の有料入場者は四百人ほど。それでも身うごきできない。

はなく、「だれがやるか」だけでいきなり。三宅榛名と二人のバンド名がいる、という結論になる。

4月3日 ジュネーブからきているルネ・ポーをホテルにたずねる。クセナキスをひきにこい、というのをことわると、ヨーロッパ音楽はヨーロッパ人がやればいいというのはナシヨナリズムだ、と批判をはじめめる。伝統文化は過去のものだから、普遍的な文化をつくるべきだ、というが、ヨーロッパ人にわかるものだけが普遍的だとおもいこんでいる。議論にかてば正しい、という調子で、日本音楽の解説までしてくれるので、不ゆかいになる。

太極拳のクラスにおくれてしまった。4月6日 ユーロスペースで豊住芳三郎十玉井達之十三宅榛名の即興をきく。観客四十人ほど。かんたんでありきたりにきこえる音からはじめて、何か奇妙なものをつくりだす榛名のやりかたがふしぎだ。自制力の問題だろう

3月22日 「世界」の編集者から電話。予定していた如月小春とのしごと

のかわりに、クセナキスをインタビュしてこれという。権威主義におこつてことわると、ではもとの企画でもいいですというので、全部をキャンセルした。岩波のしごとはぜつたいしない。

3月23日 近所のわかい男が夜やってきて、音楽家は自然とともに生きなければいけない、と議論をはじめて、なかなかかえらない。桃山晴衣とクリシユナムルテイの信者で、音楽は煙をたがやした後やればよい、というが、本人は青果市場でトラックの荷おろしをしている。

3月24日 映画「海盗り」の音付け。朝11時から夜11時半まで。現実音をつける作業をみるのがほとんど。タイトルバックの音楽を、あいまにつくる。

3月25日 音付け二日目、6時まで。水牛楽団の「高い塔の歌」のテープを流用する。

か。

4月8日 鎌倉に小倉朗を見舞う。三箇月も入院して、検査をくりかえしたあげくに、手術に同意しないと検査費に保険がつかえない、とおどす病院のはなし。肺炎を切りとつた跡より、神経の末端が切れたところの方が、布がさわつてもいたむ、というはなし。

4月9日 一日中うちにいる。しごとも当分ないので、ジャズやニューウェイブのレコードをきいて、シンセサイザーのカタログをながめてすごしている。

4月11日 三宅榛名と森山威男と三人で5月29日のための練習。ドラムセットをくんで調律するのに一時間かかる。それから二曲ためして、全部で四時間ほど。

4月12日 鈴木志郎康の「眺め斜め」を見る。

4月13日 ゴダールの「カルメンという女」を見る。

3月26日 音付け三日目。夜までつきあつて、さきにかえる。

3月27日 音付け四日目。午前中に最後の音楽テープをつくつて、さきにかえる。

3月28日 ナレーション録音。一日かかる。つくつた音楽テープの約半分は不要だった。明日のミックスタウンはまかせることにして、かえる。

3月30日 2時から水牛楽団コンサートのテープのミックスの作業。せまい室の天井近くに冷蔵庫があつて、チユーハイのかんづめがはいっている。のむ人は二百円を箱にいれる。

8時におわつた。3月31日 きのうのつづき。3時から9時まで。

4月2日 ナサ・アーティスツ・ピュローで今年から来年にかけてのしごとの打合せ。一年も前から企画をたてて、それにしぼられるのは味気ないとおもいはじめた。「何をやるか」で

4月14日 美恵と津野海太郎と三人で新宿御苑で花見。ピンクのかごにいられたかんビールとホカホカのり弁。

4月15日 コンピュータになつたゆめを見た。音列のはてしなくくりかえしがインプットされ、ところどころ音のかわりにコンニャク、シラタキ、トーフがでてきてリズムをくずすので、つかれてしまった。この信号は如月小春という名のキカイから送られてきたのだった。

4月16日 タルコフスキーの「ノスタルジア」を見る。

高橋悠治

洋服とはなしたタン吉

ボクは大(だい)四歳。もうすぐ五月に五歳になる。お母さんと、おばあちゃんとおじいちゃんとおじさんと、いっぱいのにんぎょうとくらして

いる。
こないだ、「花火のおじさん」のうちへ遊びに行った。ボクのにんぎょうの話をしたら、ぎょうざをこちそうしてくる、というのでママとカバンにいっぱいにんぎょうを入れてバスに乗って遊びに行った。あまりたくさんカバンの中ににんぎょうを入れたので、にんぎょうがケンカして大へんだった。「花火のおじさん」は、ぎょうざがなく、天ぷらを作ってくれた。ボク、ぎょうざ食べたかったのになあ。でもこんど、ぎょうざ作ってくれて。ボクのにんぎょう「花火のおじさん」のうちへ着くなり、外に出してあげた。

じさん”のうちで、そうだとわかるとママは面白がって「泣いてごらん」、と言うけど、ボク、泣かなかった。

おじさんのうちにはほかに、トラのトラーちゃん、ペンギンのペンちゃんお猿のキッキちゃんたちを連れて行っただけ。みんなで、次々に重なるようにして、月を取った。月を食べた。お日さまも取って食べようと思ったけどおばさんがあついからというのでやめた。だけど、そんなにあつかったら、毎日お日さんにてらされていて、どうしてボクたち燃えてしまわないのか、て聞いたら、おばさんは、それはずつと遠くにあるからだっていってんだ。そうか、取りに行くとき焼かれましたんだ。

「花火のおじさん」のうちには、もうひとりおばさんが来ていた。砧公園のときも来てたママのお友だちで、だけどおじさんとも仲良しみたい。ボクにきれいなステッカーくれた。そうい

おじさんのうちには、三匹の猫がいてにんぎょうたちとすぐ仲良くなった。

でも、ボクがずっと気に入ってたスヌーピーは、こないだなくなつてかわいそう。今はいちばんボクといっしょにいるのは犬のタン吉だ。でも、うちじやおじいちゃんやタン吉のことキラインんで残念だ。去年の夏もタン吉はプールへ行きたがった。泳げないのにつて思ってたけど、ロッカーの中で洋服とお友だちになつて話したいつていうから連れて行つてやった。ずい分長いこと話してみたい。

沖繩までいっしょに行ったのは、だけどタン吉じゃなくコアラのハタちゃんだ。ハタちゃんやシタブチちゃんとキッキちゃんはひよこ組なんだ。シタブチちゃんは、今ではうちでもいちばん古い羊で、キッキちゃんはカワイイ猿。

キューピーのサンドイッチとアカコそれにリスのパリントンは、三つ子で

えば「花火のおじさん」も親切で、その辺にある物、ボクがさわつたら、なんでもすぐくれるつていうんだもの。

ボク、小さな赤い自動車、屋根の上に黄色いスキーついているのと、緑の小さい自動車もらつちやつた。うしろへぐーんと引張つてはなすと、すうつと走るんだ。口から火を吹くカイジュウもいた。おじさんはそれもあげるといったけど、少しコワそうだったからいらないうつていった。小さなハモニカも青い箱の中に入つていた。それも吹いてみた。でも、くれるといわなかつたのでもらえなかつた。

天ぷら食べて、ナスビの煮たのもおいしくて食べて、ステッカーくれたおばさんが持つてきた小さいケーキをみつも食べて、おまけにママが持つて行つたイチゴもいっっぱい食べて、おなか大きくなつたら、おじさんのうちにいるのあきちやつたから、「帰ろうよ」とママにせがんだ。

ひとつの家に住んでいる。でも「花火のおじさん」中には、パリントんしか連れてこなかつたから、サンドイッチとアカコがどんなコか、おじさんにはわかんなかつたろうな。

おじさんの作つてくれたエビの天ぷらはおいしくて、ひとりですつても食べちゃつた。猫にやつたけど、食べないでそのままといつたら、廊下に落ちてるのをおじさんが拾つて食べちゃつた。へんなおじさん。

そういえば、こないだママや、女のコの友だちのアンリや、ほかにいっぱいのおとなと砧公園に行った時も「花火のおじさん」が来て、寝転がって別のおじさんに身体さわられたら、すぐ変な声出してたな。あまり長い間、あまり変な声出すので、周りにいろんな人集つてきちゃつた。

アンリちゃんはカワイイけど、ボクに時々ムリなこと言うんだ。ボクはやさしいけど泣き虫なんだ。「花火のお

シタブチちゃん、キッキちゃん、トラーちゃん、ペンちゃん、パリントんちゃん、ハタちゃん、みんなまたカバンの中へ入れて、大きいタン吉はだつこして、帰ることにした。カバンがいっぱいで、にんぎょうたち、ケンカしないかなあ、と思つたけど、みんな仲良くしてた。帰りは夜だったし、ママがタクシーで帰らせてくれた。今度はぎょうざ食べに行こ。でも、にんぎょうの話なんか聞いて、あのおじさんなにおもしろかつたのかしら。それとも誰もいないから淋しいので、ボクらのことおいてつていふのかな。

みやたにだい 話

バスを待っていたら、びよんびよんとピンクのタイツの足が現れた。あれ、きれいな足と見ると、髪をまとめておだんごに結った、やけにきれいな首すじの女の子がいた。あ、小さなバレリーナ……と、どうして思ったのかな？

と、すぐにもう一人、女の子が現れた。おやおや、二人ともまるでおんなじじゃない。ピンクのタイツにピンクのズック靴、赤いスカート、赤いジャンパー。あとからの子は頭はポニーテール。二人とも髪をまとめているから、顔がつると、ほんとに玉子だね。

「いい？ タララ、タララ、タラ……」爪先をつんと前に出してびよこつと膝を曲げて、二人並んで始めたから、あはは……あたり！ やっぱりバレリーナ。今からおけいこに行くのね。いいねえ。

私は体の弱いかわいそうな子供だったから、お絵描帳にバレリーナの絵ばかり描いていました。今だって同じようなもんですね。



行ったり来たり

三月二十三日 田無の同じ地域に住む仲間が主催した絵本「ひろしまのピカ」「みなまた海のこえ」の原画展がやっと終わった。十七日からの一週間で入場者は千人。田無の人口が六万人強だから、一%以上の人たちが見に来てくれたことになる。映画の上映や集会だと仲々こうはいかない。やはり、フアンが多い丸木俊さんの絵本原画の強みか。とはいえ、主催した共同保有所「にんじん」、にんじん文庫の女性たちの頑張りも凄かった。チケットの配券総数は四千枚弱、うち、三千枚の配券は僅か一週間足らずという早技だった。しかも、立正交成会にまで、魔手は伸びていたのだから脱帽である。「自民党にまで手を伸ばせば良かった」とは、彼女たちの反省の弁。

四月一日 埼玉県新座市の新座団地

り易く描かれている。それにしても、海を盗られてゆくことを推進した筈の浜関根漁業組合長の西口才太郎氏が、むつ廃船論の出できた渦中で語った。国は本当に信用出来ん！ という言葉は、何にも増して迫力を持ったし、この映画の主題を見事に言い表わしていると思った。スタッフの皆さん、ほんとうにご苦労さんでした。

我身にしてみれば、この日ほど早く次なる映画を撮りたいと思ったことはなかった。

四月九日 日系カナダ人の詩人・小説家として「失われた祖国」を邦訳出版したジョイ・コガワさんと中野で会う。記録社の庄さん、青林舎の山上徹二郎、カメラマンの天津幸四郎氏と共に、コガワさんが切望している映画化について、ない智恵を絞る合う。だがいかんせん。急な相談ゆえに誰も本を讀めていず、智恵も出せない。コガワさん申し訳ない。

内にある「よろずや」へ久し振りに行く。ここは、学童保育や水俣、「障害」者問題などに関わる人たちが中心になってつくった「産直の品物を扱う」店。最近では全国的？に名が知られるようになってか、店内には各地の情報が盛り沢山だ。一年半前と楽天的で愛すべき「アホな連中が、酒の席で語り合っている内にこの店の構想が生まれたという。よろずや」の名の通り、ここには子供から年寄りまでが、随時集まっている。特に若者の土曜日などは、「ドンキホーテ」と称する酒場に早変わりして、サタデー・ナイト・パーティーになることもしばしばである。千円もあれば酩酊する程に飲める。これは本当！ 地域の中で共に生きる関係っていうのは、このように「自前の場」をつくり出してしまおうエネルギーと、アホみたいな楽天性に支えられるんだなあ」と改めて実感。興味のある方はぜひ一度行ってみて下さい。

ただ、良かったのは、彼女が希望した「ミナマタからのメッセージ」(英語版)のビデオを見せてあげられた事だ。カナダにも先住民族のインディアン居留地で水俣病が発生している。問題こそ違え、コガワさんの中では、カナダインディアンに置かれた状況と自らのテーマ(少数民族)が重なり合いショックを受けた様子であった。あとで彼女は「見せて貰って本当に良かった」と私に洩らした。

翌々日、コガワさんはカナダへと帰っていった。

四月十日 地元田無の新聞に連載する原稿を書く。いつもながら、すらすらと書けない。あかんのう。

四月十一日 友人の瀬谷養護学校の教師をしている高崎明君から電話が入る。彼がつき合っている四ツ葉牛乳関西共同購入会の人たちが映画「みちことオーサ」の上映をしたいという。嬉しい電話だ。彼は、およそ先生らしい

連絡先は○四八四一八一三三三七
四月二日、音楽家の毛利蔵人氏宅に伺う。小田急線鶴川駅の閑静なところに彼の住いはある。用件は、昨年の暮に再生不活性貧血症で亡くなった六才半の女の子の、父親が撮りためた記録フィルムを編集してくれないかという相談。その女の子は、毛利さんのピアノの教え子だったという。父親も同席されていたが、話を聞きアルバムをめぐめる内に、同じ年頃の我が息子を思い出せつなくなってしまう。

四月七日 海盗り——下北半島・浜関根の初号試写。土本さんの最新作がとうとう完成した。いま、下北半島はどうなっているのか？ との問いに明解に答えられる映画だ。原子力船むつ(の再母港化(浜関根)決定に至るプロセスを軸に、F16フアントムが配備された三沢基地。国家石油備蓄基地になり果てた六ヶ所村。大間の原発予定地など、矛盾だらけの日本の縮図が分か

らぬ先生である。というのは、休みになると人の映画(根の国・世界は恐怖する)を持って、全国を歩いたり、かといえ、ひよいとベラウなどに出かけてみたりする。とに角、フットワークが良い。思いついたら何でもこなしてしまう。学校の中で水俣の甘夏の産直をやったり、自分で新聞まで発行してしまう。題して「りんごの街の新聞」。組合新聞もある。こちらは、「組合ホイホイ」とに角、愛しき人物である。

西山正啓

ブタ草の生態

今、花粉症というのが流行っている。私の友人のI君はそのせいで結膜炎になって目がよく見えないのだと言う。「花粉症はね、夜鼻がつまって眠れなくて、そう、片っぽずつつまるんでずってよお」なんて、知ったか振ったおばさんが電車の中でお話ししてるのを耳にするけれど、いつも私は、「ふうんだ、私なんか昔っから花粉には敏感で、片っぽずつなんてケチくさいこと言わずに、両方いっぺんにつまっちゃうんだゾーっ！」と心の中で自慢している。

ところがどっこい、今春は何故か鈍感なわたし。くしやみの一つ、鼻水の一滴滴とおよびでない。うふふふ、隠したってダメさ。ネタはあがつてるんだ。花粉症なんてしやらくせえ。敵は、ム、ム、虫歯菌だあ。アレルギー性の

病は、体のどこかに大けがをしていたりすると発病しにくいのだそう。今は今、歯にけがをしているんだ。左上の奥歯がかわいそうなことになっている。SOS……SOS……。も、もうすぐ神経が全部やられて、やつらが脳みそに侵入してしまふ。そして朝目覚めると、「私はブタ草、ブタ草のブはブルマーのブ、ブタ草のタはタコの八つちゃんのだ……」なんて口走った暁には、もう手遅れだ。し、しかし私は歯医者がこわい！ 恐怖心の反動からつい歯医者の言いつけに背いてしまふ。去年の夏に親知らずを抜いた時も、麻酔がまだ切れもしないうちに釜めしを食べて、歯ぐきにあいた穴につめものをしてしまふ大変な騒ぎだった。今のバイト先で隣に座っているアネゴは一本も虫歯がない。歯医者に行ったことがないなんて、どんなにカッコつけたってよー、人生の苦しみを半分知らないようなもんさね。ははは。

ついでに私のかわいそうな乳歯の話をしよう。私の前歯は当時、みごとなみそっ歯だった。小学校一年生の時、休み時間にゲタ箱のところにポーツと立っていたら六年生の男の子が突進してきたのだ。グワシャーん!! 気がついたらみそっ歯が全部ぐらぐらだった。四時間目は道徳のテレビを見る時間だった。私は自分の口の中が血だらけだとか痛くて死にそうだななどということには誰にも言わず、マンガのプリントのハンカチで口をおさえながら黙ってテレビを見ていた。うちに帰ってから、扇風機の前で口を開けたまま半日声をあげて泣いていたそう。おかげでその時前歯は全部抜けおちてしまった。子供の頃のこういうたぐいの話は、みじめなだけでなく、どことなくけなげさを伴うものだ。やはりこれも幼少時のできごと。右手の中指の先が瘻瘻になり黄色く膿んでしまった。母がしばらく留守をしていたので、誰にも言

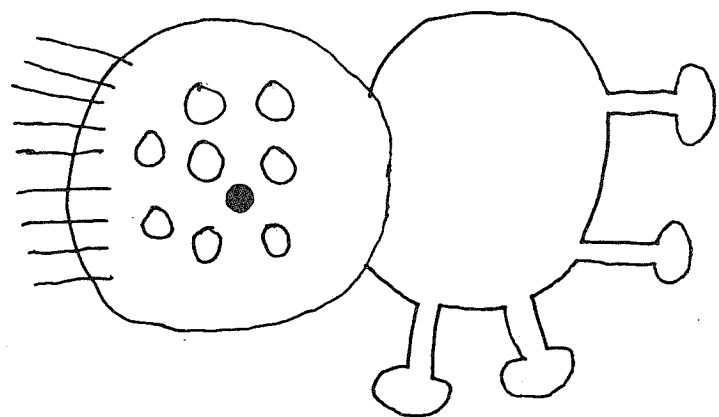
えず、ある日陽のあたる縁側で自分で皮を破り消毒をして包帯をまきつけた。夜、父親にどうしたのかと聞かれ、「うん？ 何でもないの」と答えたのだから泣けるじゃありませんか。けれどもそれ以来、右手の中指は変型し、努力の甲斐も空しい。

幸い今までに入院経験なし。めでたしめでたし。「あなたは何の屈託もない顔をしているから巨人ファンだろう」と、今日もある人に言われた。私に屈託があるうとなかろうと関係ないとしても、事実私は巨人ファンだ。でも、千代の富士や北の湖はあまりお気に入りでないし、坂口征二が好きだと言ってはバカにされる。テニスは下手だしスキーも一回きりだし、かけっこはおそいし、それに極めつけ、今私、ブヨブヨしてる。8階建てのビルの中で来る日も来る日もオフィスレディでしょ。よんだんだ空気を吸うのが嫌だから、知らず知らずのうちに皮膚だけが勝手に

息してる感じで、皮のすぐ下の肉がみんな泡立ってしまったみたい……だからブヨブヨしてる。それでも朝のラッシュアワーには負けないし、きのうは稽古にもちゃんと出た。それに、「文章書くことが苦手、笑っちゃってもゴマかせないし、身振り手振りも役に立たないしね、オレには筆は似合わない」なんて言いながらもこうやって活字と格闘してる。これは事件ですよ。

あまり信頼されそうにないけれども、幼少時の私は、亜虚弱体質くらいの軟弱児童だった。今でこそにきびもつぶすし、三日三晩徹夜だってできる。でも、小さい分両親には迷惑をかけた。

身体髪膚 コレヲ父母ニ受ク
アヘテ毀傷セザルハ孝ノ始メナリ
ずい分前に父親にわけもわからず覚えさせられたのだが、今だにまともな口にするのは照れ臭いので、
アヘテ毀傷セザルハ 三文の得
と言うことになっている。今日も元気だ、



竹内晶子

ごはんがうまい!! 今のところこれが極道娘の精一杯である。

ポーランドの作家マレク・ノヴァコフスキ逮捕のニュースが入りました。

ポーランド政府機関紙「ジエチボスポリタ」とブリュッセル在外調整局の「ニュース・ソリダルノシチ」の記事、およびノヴァコフスキの最新短編を、ポーランド資料センター発行の「ポーランド月報」より転載します。

マレク・N逮捕

ワルシヤ軍検察局により行われている審理との関連で、検察当局決定に従い、今月7日ワルシヤ在住の作家マレク・Nが逮捕された。

容疑は、ポーランドの国家利益を害せんとして活動している西側組織の代表者との協力である。現在、彼は取り調べ中である。(PAP通信)

[Arrestowanie Marka N, "Rzeczpospolita"
No.59 (668), 9.03.84, str.8]

著名な作家マレク・ノヴァコフスキが、3月7日ワルシヤワにおいて、ポーランド国家に有害な活動を行う西側組織との協力^の容疑で逮捕された。ノヴァコフスキは、ポーランドで地下出版され多くの西側諸国でも翻訳された戒

く。そのようなほんとうの時間が一九八〇年九月から始まった。しかしたちまちにそれは終わった。

ふたたび待合室。用件をかかえた人びとの不毛な待機。からっぽの蛇口からは水が滴り、窓ガラスには蠅が羽音を立てる。埃とクモの巣、灰いろでよごれっばい、隅にはタン壺が……、そしてあの頑丈なドア、われわれは緊張してそのドアを見つめる、ドアはしっかりとじられたままゆるぎもしない。住居の手入れのことさえさしひかえているわれわれだ、どこかもっと大きな部屋をさがすことなどはもう口にも出さない、ちいさな鳥かごほどのなかで息をつまらせているのだが。

だれもかれもが根本的な問題を先のばしにしている。われわれの生き方はいささかビバークそっくりだ。その場しのぎ。こうして待つうちに、歯はぬげ落ち、髪は白くなり、生活機能の活動をとめ、心臓が腎臓が肝臓がだめになって行く。頭はぼけ、目がかすんでくる。それからどうなのか？ 最後の瞬間、ふとわれに返る。見回すと、相も変わらず、その同じ待合室にすわっていることに気づく。

「日常からのおぼえ書き一九八二年十二月〜八三年七月」(一九八二年パリ刊)より。

厳令下を描く短編集で有名である(邦訳『ワルシヤワ 冬の日々』晶文社)。一九八三年に彼はフランスのペンクラブから「自由賞」を与えられ、また「連帯」暫定調整委員会の一九八一、八二年度文化賞を受賞している。ヨランタ夫人は元KORのメンバーであるアダム・ミフニク(逮捕されて裁判準備中)の弁護士をつとめている。

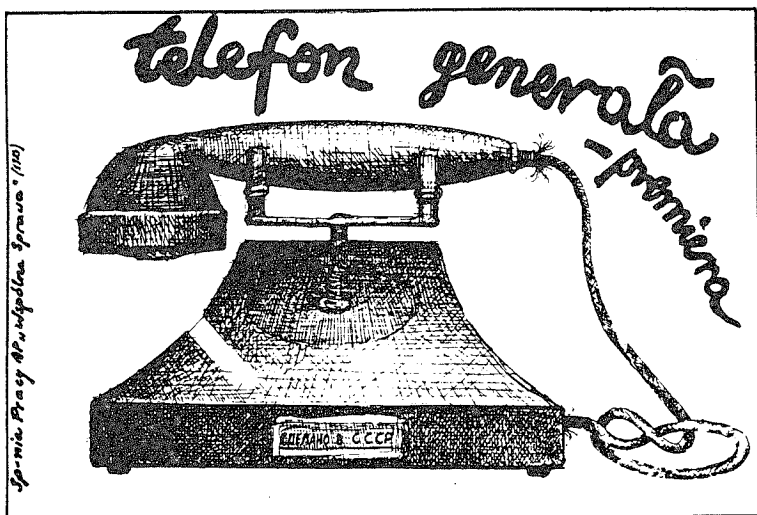
["News Solidarnosc" No.19, 15 March 1984]

万物は流転す

マレク・ノヴァコフスキ
工藤幸雄 訳

「時」についてわれわれは話し合う。われわれの体制のなかでの特異な概念としての「時」。また特異に体験されてきた「時間」。立ちどまったまま動かない「時間」という果てしない印象。待合室だ。

ほんとうの「時」はまだ始まらないまま。やってくるのはこれからである。それが変化をみせる短い期間がなんどかある。よごんだ水の表面の牛乳の薄皮のようなものが動き、わきたち始める——流れと渦と。そのとき、われわれは生命を感じる。電気が秒を、分を、時間を伝わりつらぬ



ヤルゼルスキ首相専用電話。前面に「ソ連製」の文字が見える。モスクワとの直通電話なのだろう。ご覧の通りダイヤルがなく、こちらからはかけられない上、受話器まで「聞くだけ」。

ボクが作った本

先月の仕事地獄で、どうやら脳ミンがやわらかくなってしまったようだ、すこし太陽にあたって水抜きをせねばと今月は散歩と庭そうじと焚火の回数がふえた。

●当世出版事情、林邦夫、草思社、毎日新聞に連載されたルポを一冊にまとめたもの。いまや出版界は内憂外患まさに戦国時代の様相……これは帯に書かれるはずのタタキであったが、新聞連載というのが頭にこびりついて、新聞みたいなレイアウトにして、そこに使ってしまおうと話がまとまる。いっばい本をつみ上げてそれを写真に撮って、そんな案も出たけど、どうも売れ残ったみたいでクライネやめとこ。出版社はみんな苦勞しているのだ、とりあえずみんな本を買おう。

●駆けぬけた夏、柴田隆、島野千鶴子

遊覧、この二冊は新潮社トシボの本。写真と文章の構成によるグラフィカルな新シリーズ。といってももう幾冊も出ているけど……。猿之助のほうは早替りや仕かけからくりきわものの世界。中華人民……のほうは写真家の島尾さんと奥さんの撮りためた百貨物の世界。ところがこれがトラブルその2。彼らは元来このシリーズのために仕事をしてきたのではないから、フォーマットのきまつたこの線は大いに不満。おまけに表1・表4のデザイン構想まですっかり出来上っていたらしく、それを多くのデザイナーに無理矢理おしこめることになってしまった。お互いに残念。

●発語訓練、小林信彦、河村要助絵、新潮社、要助氏のイラスト上りが大巾に遅れた。こういう時には火事場のクソ力、きつといい仕事ができるものがあります。この本は前作「ちはやふる奥の細道」の前にくるべき短編集で、練習小説つまり発語訓練というわけか、

絵、理論社、今江祥智さんの編集で新シリーズなんだけれども各冊単行本のようになると注文はいはいと返事したけど心もとない。島野さんの絵は型染下絵を筆でかいたものをわりと忠実に型紙に切りぬいて孔版にしたもの、だからもしも編集者の方が途中で紛失なさってもすぐに作れます。と関西弁で言いましたとか。絵はまことに力作、あまりにきまりすぎてタイトルの位置を決めるのに二日かかってしまう。あっちこっちと動かしてははっぴりなげて日が暮れる。作者の柴田さんの結婚式には絶対間に合せたいと迫る編集者さあどうするどうする。

●書齋生活術、文庫蒐集からワープロ活用まで、紀田順一郎、双葉社、新書判、編集者桑村さんひさびさの登場、今回はなぜかマイコンにこっぴいてその話で一晩酒を呑まれた。その前はピロン野球、ダーツゲームとさんざん巻き上げられ、いったい俺はなにやっ

どっかで聞いたことのあるこのタイトルにひきずられるイメージは、まず会話の本のようであること、「ちはやふる……」が英語で書かれた芭蕉を翻訳したことになっていてから今回も、あちら側からこっちを見るところな本が出来上るのではないだろうか、これがいわゆるひとつのアイディア。

●アガサ・クリステイの贈物、ジェフリー・フラインマン、諸岡敏行訳、品文社セレクトション、トラブルその3。タイトル文字書き直し、書き直したけどどうもうまくない。やり直すということとはとどまるところを知らない。

●どうすればいいか10代心身症 キヤスリン・マッコイ、片岡しのぶ訳、品文社、ほんとにね。タイポグラフィでいこうよ、各症例を並べて。自尊心の喪失 無気力 倦怠 睡眠障害 不機嫌 家庭内暴力 家出 万引 性的乱行 麻薬中毒 喫煙 自己卑下 無断欠席 登校拒否 自殺 妊娠 飲酒

てんだろうか。デザイン料いくらくれるの？ 古いブック・プレート(蔵書票)の中に毛虫みたいな男が本の間にはさまっている「本の虫にながし某」つてのがあった、それを表紙に使いました。

●愛のはじまるとき、K・M・ペイトン、石井清子訳、柳生まち子絵、品文社、英国女流ベストセラー作家の手になる多感な思春期の少女の物語。イラストが描きなおしになる。トラブルその1。

●ジャズが若かったころ、内田修、河村要助絵、犀の本、品文社、著者の内田先生は名古屋のお医者さん。ぼくらがモダンジャズのとりこになって以来そのお名前は時々耳にした程のジャズ狂の先生。草月ミュージック・インあたりの和田誠さんのイラストでカバーをやるってのはどうかねと思つたら、もっとナウイ線でいこうよと編集部。

●猿之助の歌舞伎講座・中華人民百貨

過食 拒食 落第 自信喪失 責任転嫁 感情障害 退屈 反抗 思いあたる節のある方はこの本を買って読んでみよう。

●ここにきてハタとこまった。もう記録すべき本がない、あとは思想の科学五月号、あとは世界から春号、飛ぶ教室第10号と、ほんとにこれだけかね。今月は意見のいき違いやら、思わぬところでトラボルタ。本には関係ないけど打合せたことが二転三転……。重い倦怠感が無気力と睡眠障害の結果の不機嫌で喫煙と飲酒はそれほどのこともなく過食ぎみ。ああ40代心身症(四月二十日)

平野甲賀

わるいくせ

三月十七日 朝10時30分にうちのピアノの調律がはじまったので、即にはだした。こういうときは本屋で立ち読みなどして時間をつぶすにかぎる。ほとんどの本屋でマンガが事実上立ち読みを禁じられているのは、ばかっている。読んでおもしろければ買うのに。

三月十八日 久しぶりによい天気の安息日。「スター」の坂本龍一さんはこういう日もいそがしくしているのかしらとおもいを馳せつつ、ずっとコタツにあたり、昼間からビールをのみつつ、中毒患者のごとくマンガを読みふける。たいてい雑誌で読んではいらぬのだが、単行本になった長篇を一気に読むのがまたこたえられない。そのため連載中のものは、単行本になるたびに買って置いて、完結するまで読まずに保存してある。

らくのはきらいだといながら、子どもといっしょにアメリカにわたって、わずか一年足らずで自分の店をはじめのバイタリティー、係累が多く、またそのひとりひとりがそれぞれに「人物」であることなど、彼女のはなしをきいていると（とてもはなしすぎなのだ）頭の奥でコレハナシカシッテルハナシダという声がする。そうか、あれだ、M・M・キングストン（この人は中国系アメリカ人）の「アメリカの中国人」という本。厚い本でまだ読みおえてないが、こんど彼女が仕入れて東京にくるときまでには読んで、彼女に貸してやろう。そして何をおもうか、きいてみよう。いいかんがえだ。

彼女の要望で、夜いっしょに近くの銭湯に行った。

四月五日 水牛の校正をおえて本屋に寄ったら、好きな人の本がでていたのでまよわず買う。アイザック・B・シンガー「愛のイェントル」、ガートル

「バジル氏の優雅な生活」を読むうち誤解されるのをおそれて、これまでだれにもうちあげたことのない自己認識が印刷されているのでおどろいた。

「私」運が強いだけよ 願いがかなう事になっているの 性質なのね」

三月二十日 渋谷ライブ・インで、トキーヨ・ミートイング84というコンサートをみる。フリーの即興を十人もでガンガンやっているのを見ているうちに、まあ、みるといっても、お客のたばこの煙とステージの両脇につきかさなっている音楽用機械箱のおかげでそもそよくみえないのだが、なんだか手に汗にぎる格闘技観戦をいった気分になってしまふ。みればステージでも各選手はスポーツタオルで、流れる汗をふいているでは いか。きいてる方も体力いるねえと、となりて三宅榛名さんもいうのだ。男の世界だぜ！

三月二十三日 葉弥と「少年ケニヤ」をみる。帰りにマンガを買う。葉弥は

ード・スタイン「Q・E・D」。ねるまでに二冊とも読んでしまった。偶然だろうけどこの二冊、表紙が同じ紙だ。

四月七日 悠治にさそわれ「海盜船」の試写をみる。土本典昭監督の健康法は、朝いちばんに排泄される自分のオシッコを飲むことだそそうだ。

四月十三日 別コミ「別冊少女コミック」のこと 発売日。おめあては、吉田秋生の「吉祥天女」。

ゴダールのゴダール自身も出ている「カルメンという名の女」をみたあとまた魔の水牛発送準備だ。田川編集長が手伝いに寄ってくれた。悠治は夜中に泥酔して帰ってきたので役に立たず、ヘラヘラと口だけの参加におわる。

四月十七日 タルコフスキーの「ノスタルジア」をみる。始まる前にちやんとトイレに行ったのに、霧、雨、温泉、清水、こぼれるミルク、と終始水っぽい画面で、すぐまた尿意をもよおした。が、こらえる。90分ぐらいたつ

「キャプテン翼」6、7、8。わたしはプチフラワー（夢みる惑星）がおわった！とLaLa（日出処天子）もついに来月でおわるのか……）

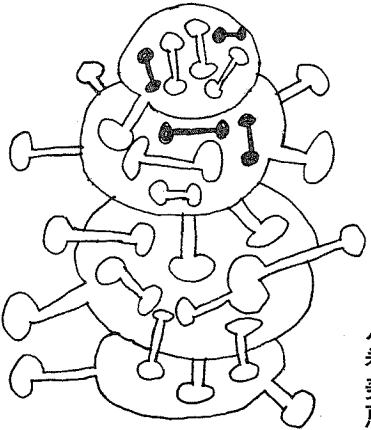
三月二十八日 春休みできのうから滞在しているまや子と葉弥と、約束の「プロジェクトA」をみる。字幕読めなくて二人ともお気の毒とおもったが、字なんか読めなくても細部までちゃんとわかっているのだった。わかりかたの回路がちがうらしい。

三月二十九日 夕方帰ってみると、航空券のトラブルで週のはじめから滞在中のピクンさんが、タイ料理をつくっている最中。家の中はいろいろよばず、三軒ぐらいい先までナムプラーとにんにくのおいがたがよつていてつくっている本人が、ひどいにおいだくさいくさいとわめいているほど。

ピクンさんは中国系のタイ人。今はロスアンジェルズに住んで、洋服や小物をお店を自力でやっている。はた

たら、すぐうしろの席の人がついにトイレに立った。つづいて、もうひとり終って上着をきょうとすると、上着からもしずくがしたたつてるような気分。六本木から、成城の平野さんの家へ。きみさんのデザイナーした、布を四メートルも使った、白いたつぷりのズボン。ステージで着てね、見たいからとデザイナーにいわれ、ボクお金さわるの好きだから受付またやりたいと太呂くんにいわれた。秋のコンサートのことをそろそろかんがえはじめよう。

八巻美恵



下手の横吹き笛日記

三月十六日 久しぶりに加藤登紀子さんのコンサートで鳥取へ行く。昨日まで何となく連日あわただしくすごしていたので、旅に出るといいうのもなかなか気分の良いものである。

ピアノ、バイオリン、フルートという編成で伴奏をつとめる。温泉旅館にとまり、四回も風呂に入ったので半熟になった。

三月十七日 出雲市でコンサート。

十月には日本中の神さまが、出雲でより合いがある故、ここ以外の場所では「神無月」という。では、ここでは何というかとというと、当然「神有月」です。本当の話です。出雲大社の本殿というめつたに入れない所に案内してもらい、神妙におまいりなどして出てくると、門の前で「南無妙法蓮華経」と四十人ほどの日蓮宗系の新興宗教の人た

ちが大声でお経をとなえていた。あれは何だったのだろう。

三月十九日 六時より八時まで、六本木のNET朝日のスタジオで、コーンシヤルの録音をする。ビゼーの「カルメン」の中の一節を使う。

三月二十一日 一時より三時半まで早稲田アバコスタジオで、羽田健太郎という人の作曲の劇伴をとる。ピアノストなので、ピアノのフレーズそのままを笛に書かれたりするので、とてもむずかしいのがでてくる。

三月二十二日 八時より、キヤニオンスタジオで、惣領君のレコードを録音する。ここ何日かで作るらしく、きようはその第一日目。

三月二十三日 夜十時より昨日の続き。十二時半までかかる。

三月二十四日 三時より、きようが最後の録音の日。六時に終る。

三月二十五日 一時より三時まで、今月の三十一日に演奏する韓国人の作

品を合わせに、バイオリンの篠崎君の家に行く。行く、といっても、同じマンションに住んでいるので、ずるずるとちよいと降りるだけだが。

五時から、また来月の演奏会の練習に池袋まで出かける。フルートばかり七人のアンサンブル。同族楽器の集まりというのはどうももうひとつ、良い音がしない。何故なんだろう。輪郭がなくなり、音がぼやける。

三月二十六日 二時から桐朋学園。ピアノとフルートの曲の練習。六時より十時まで、池辺晋一郎さん作曲の劇の音楽録音。

三月二十七日 五月に演る三宅榛名さんとの音楽会のための打ち合わせをしに三宅さん家へ。ほとんどの楽器を持って、いろんな曲をやってみたりする。五時すぎに終り。

三月二十八日 池袋ヤマハへ。五時から九時まで、オーケストラのリハーサル。

三月二十九日 明後日の音楽会の練習。ピアノとフルートの曲は、韓国人で今はベルリンに住んでいる尹伊桑のお弟子さんらしく、作品が大変によく似ている。むずかしいところも、そっくりだ。

三月三十一日 池袋西武のスタジオ200で「韓国・今日の音楽」と題して、韓国人の作品ばかり五曲のうち、「フルートとバイオリンのための・対話・」、これは羅仁容の作品。白秉東作曲「ピアノとフルートのための韻」という作品を演奏する。ホールの残響がまったくなく、泣きたくなるほどである。

終了後、すぐに、家族と熱海のおばさんの家に行き、三日に帰ってくる予定。

四月四日 二時から、ビクターで、一曲フルートのダビング。

四月十一日 七時から十時まで、NHKの午後のリサイタルの練習。

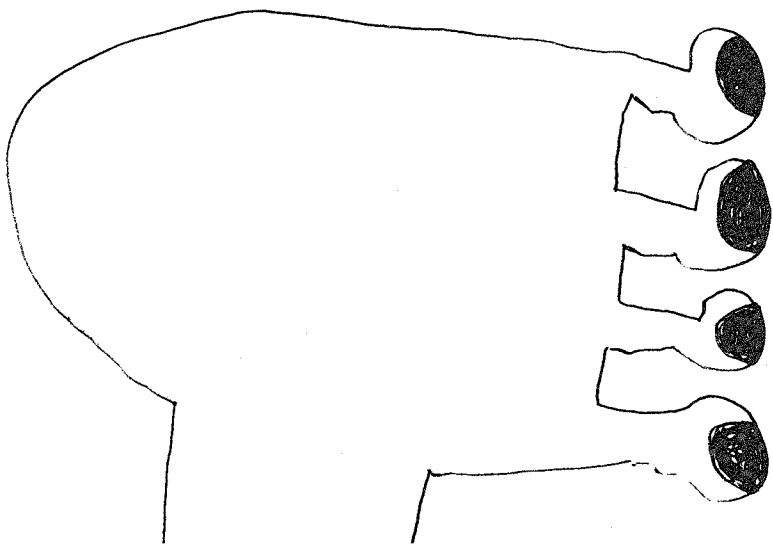
四月十二日 大久保のフリーダムスタジオ。パンフルートで、子供の歌のカラオケ用にダビング。二時間ほど吹いていたので、口が切れそうだった。

四月十三日 金曜日 夜、加藤登紀子さんのコンサートを観に行く。おどつたり、しばいをしたり、たつぷり二時間半ぐらい、盛り沢山のコンサート。

四月十四日 一時より五時まで、早稲田のアバコスタジオで、さくら映画という記録映画会社の仕事。山内忠さん作曲、たつぷりとフルートのソロを吹かしていただきました。

今回はあまり仕事にも行かず、毎日ブラブラと子供と遊んだり、飯を作ったりの毎日で、特に書くこともないので、絵をかいておきます。

西沢幸彦



友だちと呑めば本になる

友だちの情けにすがって、としかいえないようなしきたで生きていた時期がある。やはりある友人の口ききで、校正のアルバイトにありついた。原広司の『建築に何が可能か』という本だった。たえず自分の本をだしつつづけていないと安心できない人がいる。その反対に、なかなか本をだしたがらない人もいて、原さんは後者にあたる。あれ以来、かれはまだ一冊も本をだしてない。

この数年間、群馬県の渋川町で、ちいさな、だが空前絶後といっているいえないような町なみの改造計画がすすめられていた。町の人たちが自分の土地の所有権をすこしずつ放棄し、そうやってできた広場を中心に商店街をつくりなおそうという計画である。ちいさなというのは、事実、そこが日本のどこの町にもあるようなちいさな商

店街だからだし、空前絶後というのは複数の人間がそろって自分の土地を自発的に手ばなすなどということは、こんにちの日本では(たぶん)国家反逆罪を適用されかねないほどにクレイジーな行為と見なされているからだ。

東大生産科学研究所の弓状の廊下をいったりきたり、ようやく原研究室にたどりつく。計画の全過程をまとめて本にしたい。渋川では原さんたちが街なみの基本的な枠組みをつくり、それを頭において、地元の建築家や工務店が一軒一軒の商店を設計した。バラバラがバラバラであることよって成立する小地域の秩序。アナーキズムだねうん。でも、それを実現させるためにかかえこまなくてはならない「悪」があつてさ、うんぬん。

見知らぬ女性が編集室にいる。あれだれ、とそばにいた秋吉信夫にきくと、室謙二さんにたのまれてかれの長谷川

海太郎伝『踊る地平線』(仮)のコピーをとりきた人ですという。年来のごと、ようやくその三分の二ほどが書きあがったらしい。

はじめて長谷川四郎さんと会ったとき、私が名のると、かれはてれくさそうな顔をした。私の名が四郎さんの長兄の名とおなじだったからだ。ちなみにいえば本多秋五の息子の名が海太郎。黒田征太郎の息子もそう。たまたま新宿の飲み屋でとなりあわせになったとき、そのせいでちよつと険悪な空気がただよった。なにがそのせいなのかはよくわからん。室さんも息子に海太郎という名をつけた。もちろん津野ではなく長谷川のカイちゃんにあやかつたことだろう。

さつそく原稿のコピーをよむ。長谷川海太郎は谷謙二、林不忘、牧逸馬という三つのペンネームをもつ昭和初期の流行作家である。そのうちの谷謙二名で発表された「めりけん・じゃつぷ」

ものを分析し、それから一九二〇年代のアメリカ大陸における海太郎青年の放浪生活の実際を再構成していく。これが中盤の山場。頭脳的にして腕力的な大推理である。

夜、かれから電話。感想をのべよ。ただし批判をきく耳の用意はないとのこと。おもしろいよ、ほんとうに。でかいからだをもった日本人にとってのアメリカは、ちいさなからだの日本人にとってのアメリカとはどこがちがっているみたいだ。きみはのっぽだから、のっぽの海太郎にとってのアメリカがピンとくるんだらう。ただし、でかいからだにはめこまれたちいさなところのほうも、たいへんうまく書いてある。(おなじ夜、平野甲賀から講談社がブック・デザイン賞をくれるそうだという電話あり。引越し祝い、金一封)

本郷の料理屋で今井澄さんと呑む。芽野市にある諏訪中央病院の院長さん

——というよりも、十五年まえ、いまわれわれが呑んでいる店から五〇〇メートルほどはなれたところにある時計台に、ヘルメットをかぶつてたてこもつたお医者タマゴといったほうが、わかりがいいが。でも全共闘世代といったって、今井さん、ぼくとおなじどしぐらいでしよう。ええ、時計台ではわたしが最年長でした。

その後、かれは仲間といっしょに、つぶれかけた自治体病院にはいりこんで地域医療の運動をはじめた。それが諏訪中央病院である。地元の開業医の反対もあつて、たいへんな十年だったようだ。いま、今井さんはその開業医諸氏に中央病院の病棟や医療機械を解放するところろみをはじめている。病人が入院したばあいも、それまでとおなじ近所の医者が主治医として病室にやってくる事ができるようになしなうにしたい。こういう話はいすきなので、よろこんでミミとサカズキをかたむけ

た。

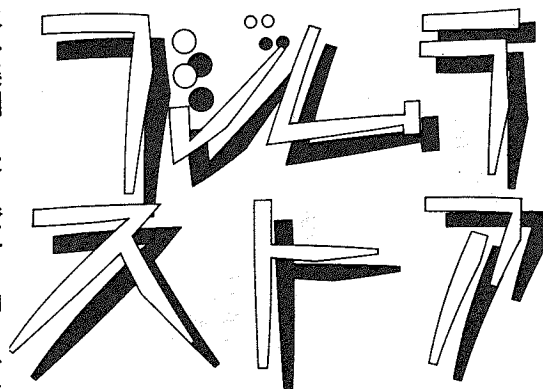
今井さんたちはまた退院した患者を家にたずねる活動をつづけている。昨年度に訪問した六十九人のうち、訪問の効果がなかったのは四人——そのひとりとは独身の老人だった。

糖尿病なんだけどね、気ままな暮らしがかえられなかったんです。なるほど、身につまされますな。おれの暮らし方まで、医者がさしずするな、こつちがたずねていったときだけ、なおしやいいんだ。はあ、そういうんですか、じいさん。そういうんです。また、いわれてみれば、そのとおりですね。医者なんてのは、そんな程度のものなのかもしれないよ。

津野海太郎

編集後記

新橋駅から筑地中央市場まで、たった四駅ほどしかないバス路線がある。終点のひとつ手前が朝日新聞社で、時折このバスを利用する。ワンマン・カーなのだが、なにか変わった運転手さんがいる。年頃も風貌もつい忘れたのだが、冬のある雨の夕方、新聞社から新橋に乗った時、終点間際で、「おつとめご苦労様。こんな寒い日は早く帰って、晚しやくでもなさって下さい」と来た。その次乗った時は、「春は名のみ」の寒い日だったが、新橋を出るなり「ヨウホウカは」ときた。あ、あの人がだと思ったが、なんのことが、一瞬わからなかった。「花を追う蜂と共に北上するといわれています。今頃はどのあたりでしょうか。今日のニュースでは、桜前線は熱海まで来たそうです。もともと、新幹線の車掌さんにも「只今、右手に富士山が見えてまいりました。今日はカラリと晴れて、頂きの雪がきれいです」と、活弁、よろしくしてくれる人もいた。ぼくが毎日乗る東横線みたいに、「来る何月何日より、東京本店では春の大バザールを行います」よりは、ずっとユーモラスだけ——。(田川)



水牛楽団十矢川澄子十如月小春
定価二三〇〇円(送料サービス)
夜這いの曲 しずくの曲 祖母
のうた 最後のノート だるま
さん千字文 ワルシヤワ労働歌
花巻農学校精神歌 ボクハソ
ンケイニスル 都市 ★編集部あ
て郵便振替で申し込んで下さい

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用して下さい。

口座名、水牛編集委員会

口座番号、東京四一九一七九二

購読料、一年分三〇〇〇円(送料共)

*住所、氏名、電話番号、何号からと明記。

*本誌は次の書店にあります。

模索舎(新宿) ☎三五二一三五七

ブックイン(阿佐谷) ☎三三三〇一七八九七

信愛書店(西荻窪) ☎三三三〇一四九六一

アール・ウィヴァン(西武池袋12F)

名古屋ウニタ書店 ☎七三二一一三八〇

ワンラブブックス(下北沢)

☎四一一一八三〇二

アイブックス(目黒) ☎四七三二四七九二

カンカンポア(西武渋谷B1)

ストアデイズ(六本木ウエイブ)

水牛通信 第六巻第五号

一九八四年五月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三(四二五) 九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ